露の答

坂口安吾

青空文庫

ぬばたまのなにかと人の問ひしとき露とこたへて消なましものを

その一

加茂五郎兵衛の加茂は古い姓です。加茂の地名や賀茂神社など諸国に見られ、之は上古に於ける加茂族の分布を示すもので、神代の頃加茂族なる一部族があり、後世諸国に分散定住し祖神を祀つて賀茂神社と称した。この部族の生業は鍛冶ではなかつたか、といふことが今日一部の民族学者によつて言はれてをりますが、加茂族だの諏訪族、三輪族など、之等は先づ国神系統の代表的な氏族でせうが、その他何々、新撰姓氏録（しんせんしょうじろく）に数百の姓氏が記載せられて古い起源を示してゐるのは衆知のことです。ところで、加茂五郎兵衛といふ人物は実際は加茂五郎兵衛といふ姓名ではありません。

明治大正の頃は知る人もあつたでせうが、今日となつては変名の必要もないかも知れぬ。けれども一時はともかく若干政界に名前の通つた人物であり、累の及ぶことを憚り変名を用ひたまでゞ、本当の姓は、加茂に類する古い姓の一つです。私が古い姓氏だの部名に就ていくらかでも知識のあるのはこの人の伝記を依頼せられて調べたことに由来し、実際この人の郷里に残る字の名や氏神などに氏族の伝統を語る名残りが歴然と有り、茫々二千年三千年、私もいさゝか感慨があつた。尤も人間誰しも類人猿以来の古い歴史があるのですが。それで変名を用ひるに当つても、之にこだはる思ひが残つて、加茂族の加茂を借用に及びいさゝか懐古の感慨を満した次第です。したがつて、人物の変名につれ、町村山河の名も仮名ですが、天地は玄の又玄、物の名の如きは問題ではないといふ、之は大体加茂五郎兵衛の思想でもありました。

尤も加茂五郎兵衛は決して大政治家ではありません。今で申せば政務次官ぐらゐのところで政界と縁を切りましたが、このときは大変な騒ぎであつた。

時の内閣に大命が降るに就ては裏に事情があつて、その代り之々のことを実現してくれろ、さういふ条件が世話人と其方面とに結ばれてをつた。勿論世話人から新総理たる人にその旨通じてはありましたが、この新首相が、大政治家といふのか大理想家といふのか、之を称して大人物と申すのかも知れませんが、約束だの前言などゝいふものに束縛せられるやうな狭い量見がございません。ズラリと並んだ新大臣が又いづれ劣らぬ大人物で、司法大臣が支那問題に就て大演説をするかと思へば、総理大臣の施政演説と同じ要領で方針を説く大臣もあります。官僚的実務を馬糞の如くに蹂躙して政治の勢威豪快華美なること今日の如くに人心のコセ〳〵した時代の量見では推量もつきません。行政事務は各々専門の次官にまかせ大風呂敷をひろげて天下国家をコンパスでひいた円のやうに自在又流暢にあつかつてをります。

組閣当初の約束などはどこへ消えたか影も形もない有様に、世話人は慌てました。この世話人と特に親交のあつたのが加茂五郎兵衛です。

そこで五郎兵衛は総理に面会して、あの約束はどうなつたか、早々実現してくれろ、と掛合ふ。もとより大人物のことですから、ウム、約束は実現せなければいかんのである、と言つて一も二もなく思ひ出してくれる。それのみにとゞまらず、その方面の大臣が又言

ふまでもなく大人物で、ウム約束ならば実現せなければいかんのである、と之又屈託がない。そこで次官と折衝する、次官は専門の行政官ですから頭の中には机の抽斗（ひきだし）だの書類だのが充填してをります。大いに驚いて、そんなことが君できるものか、と最後的見幕を以て開き直つてしまつた。

　生憎この約束は内閣の公約した政策と全然反対のものであつた。とはいへ、そこは大人物の内閣で、右から左へ曲るぐらゐにこだはる量見はないのですから、光風霽月（せいげつ）と申しますか、水従方円器と申しますか、明鏡止水の心境です。内閣の方では全然こだはらぬにも拘らず、之が世間へもれてくると、大問題になつた。

　この次官は後に官僚をやめて反対党に走り大臣になつて辣腕をふるつた人物ですから、五郎兵衛の折衝は重且（かつ）大です。ところが五郎兵衛はそのとき私事に悩んでをつて、居所さへ定かならず、一世一代の腕の見せ場所で、時を失し、機を失した。五郎兵衛の居所を探すために院外団が東西又南北の待合を走り廻つたといふ有様で、要するに彼も亦一方の大人物であつたかも知れません。

　当時加茂五郎兵衛の悩める私事は恋愛であつた。恋に痩せ千々に乱れるといふのは奈良平安の昔から我が政治家の美徳です。ところが五郎兵衛は恋そのものにはさして乱れてゐませんでしたが、執念の女に追はれて、大いに悩んでをりました。

　この女はお玉と云つて、元は加茂家の女中です。先夫人の死去と共に、いつとなく後妻のやうな位置に坐り、美人でもなければ才女でもないのですが、加茂家を切廻す権勢は大したものです。意地ッ張りで右と言つたら以後の人世は左に目をやらぬタチで、内助の功などは全くなく、先夫人の子供達は去勢された有様でありました。

　折しも五郎兵衛は踊りの師匠の娘と恋に落ち、漁色の余裕を喪失して真の闇路を踏み迷ふ身となつた。そのとき五郎兵衛は五十三、娘はとつて十九です。娘は琴、長唄、踊りなど諸芸に通じ、国文学の素養が深くて伊勢物語の現代語訳を遺した程の才媛ですが、又、自作の小唄など幽玄沈痛な傑作があつたといふ通人で、知る程の男子に悔恨を植ゑた佳人です。かほどの人が五十三の五郎兵衛と相思の仲に落ちたといふ、もとより五郎兵衛に凡ならざる取柄があつてのことでせうが、この娘も変り者です。親の師匠も承知で、それに就ては正式に結婚してくれろ、といふ、五郎兵衛もその肚ですが、お玉が頑張つてゐますから、根岸の里に然るべき住居を定めて新婚生活を始めましたが、之をお玉が嗅ぎつけたから、刃物三昧です。根岸の里にも居られぬ、親元も危い、そこで新夫人はあの旅館この待合と居所を変へてお玉の襲撃をかはしますが、之につれて五郎兵衛の居所も定かでない。之が五郎兵衛一世一代の大事に於ける行状です。

　五郎兵衛の醜態、不手際にも罪はあつたが、元々内閣の成立に無理があつた。そのうへ内務省と司法省とで管轄上のことから暗闘があつて反内閣的火の手が司法官内部に起つたから、この問題が刑法上の事件になつた、そこで五郎兵衛は政界を失脚しましたが、このとき五郎兵衛は腹を切つた。家人が気付いて早々医師の手を加へたから危い命をくひとめましたが、大時代の出来事で、男を上げたのやら下げたのやら、とにかく賑かな騒ぎでした。五郎兵衛が一切の不思議なくらゐ五郎兵衛の頭が上らなかつた理由は奈辺にありますか、それでも彼は常住女色に踏み迷ひ絶えざる波瀾を捲き起してはをりました。

責任を負ひ累の四方に及ぶを避けるために腹を切つたといふ、事実検事の追及も有耶無耶に結局事件は不起訴に終りましたが、五郎兵衛の切腹は実は嘘です、なるほど五郎兵衛の腹中に脇差が刺込まれてはをつた、けれどもこの脇差は狂乱のお玉が突刺したので、之を切腹にしたのは咄嗟の五郎兵衛の機転でした。女中に腹を突刺されるといふ三面記事は醜態ですが、それにしても、丁度ハラキリが有つても良いときに背中ではなく腹を突刺された五郎兵衛は幸運でした、これは五郎兵衛の長男であり加茂家の当主たる人が目撃した事実ですから、間違ひはない。

そのとき、五郎兵衛は落付いてゐた。傷口を片手で押へ、家人に向つて真相を口外するなと申し渡したさうですが、五郎兵衛が落付いてゐるので、手の指の間から臓物がたれ落ちてゐても、家人は傷が浅いのだと思つてゐた。実は瀕死の重傷でした。五郎兵衛は血のたれる脇差を執上げて眺めすかしてバカめ、之は金比羅様（だか稲荷様だか）の参拝の道の茶店の床の間で見付けて二十五円（だかいくらだか）で買つた安物だ。選りに選つて一番安物を掴みだしてくるとは貴様の下素根性のせゐだらう、とブツ〳〵叱言だか強がりだか言つてゐたさうです。そこで病床から指図して、お玉の別居を申渡した由ですが、之は快心事であつたに相違ない。さすがのお玉も抗する術なく、かくて退院と共に晴れて新婚生活にはいつたのですから、五郎兵衛は腹の脇差を最大限に利用して利息まで稼いだ。爾来政界への野心もなく悠々新夫人との生活を愛したのですが、新夫人は幸薄く、五郎兵衛に先じて鬼籍の人となつた。わすれがたみが一人、女児で、折葉といふ。五郎兵衛は折葉を愛すること一方ならず、散歩に、酒席に、観劇に、訪問に、影の形に添ふ如く手放したことがない。折葉はこの物語の主要なる人物の一人です。

五郎兵衛は折葉十二の年に永眠しました。晩年は読書、碁、酒、観劇などに日を送り、折葉にまさる愛人はなかつたと申しますから平穏な晩年です。

その二

私が加茂五郎兵衛の伝記編纂に当ることになつたのは、木村鉄山先生のはからひでした。先生は明治中期の政客ですが、明治後期は企業家、大正以後は趣味家です。別段出入りをしてゐたわけではなかつたのですが、同郷のせゐで私の名前を記憶にとゞめてをられ、折にふれて拙作に目を通されたこともあつた由で、一般の世評よりも高く評価して下さつた。それで加茂五郎兵衛の伝記をあの男にやらせてみよう、さういふことになつて、先生のお宅へ招ぜられて、貴君は目下不遇なる三文文士だけれども筆力非凡将来の大器であるから作中の人物としては加茂五郎兵衛が不足かも知れぬがマアこの際役不足を我慢して御尽力願ふ、などゝ最大級に激励していたゞいた。先生はオダテの名人です。私の感激致したのは申すまでもありません。

そのとき先生から明治大正政界の裏面史に就て一通り講説を受けて、尚又諸方への紹介状、総理大臣、総裁、大臣前大臣といふ方々ですが、ですから私は大変多くの大人物にお目にかゝつた。天下名題の大人物のことですから各々一風変つて威風は一々肺肝に銘じてゐますが、この訪問記は割愛致します。

かくて最後に加茂五郎兵衛の故山の家に赴いて、こゝで資料を整

理し、気が向いたらそこで執筆もよろしからう、かういふ話で、私が加茂村を訪れたのは昭和×年、私は二十九です。

筆力非凡将来の大器といふ先生の宣伝が行き渡つてをりますから、山間の小村では現在の大器の如く丁重に待遇せられる、都会の陋巷でその日の衣食に窮してゐた三文文士が突然仙境に踏み迷つたわけです。

加茂家の当主は太郎丸といふ変つた名前で、やがて五十に手のとゞく年配でしたが、当主に限らずいつたいが加茂家の人々は全く一風変つてゐました。

始めて加茂家を訪れたとき、現れたのは静江夫人で、よくこそサア〳〵と招じ入れて、之が大変なお喋りです。十年の知己と未知の人に区別のないのは結構ですが、人によつて話題の選択を考慮致しませんから、知らない土地、知らない人の名が続出で、私は雲中に坐して雲雀の声をきく如く黙してをります。近頃の東京はいかゞでございますかと訊くによつて答弁を発しようとするうちに、私共が東京にをりましたころ、と忽ち思ひ出は十年前二十年前三十年前と際限もなく彷徨とゞまるところを知りません。

そのとき一人の男が一束の薪木を担いで裏口から這入つてきて、ドサリと土間へ投落すと、次に鉈をふるつて薪木を切りはじめました。田舎の家は入口からズツと奥まで土間が通つてゐて、旧家になると、この土間でキャッチボールができるぐらゐ広々としてゐる。土間の片側は寄りつきの間、茶の間、仏間などで、片側は台所、湯殿などですが、この家では土間を利用した洋風の応接間があり横綱でも余るぐらゐの大きな椅子が置いてある。私たちは茶の間にゐた。男は土間の中央に薪木を投げだして鉈をふるひはじめたのですが、薪木を切断するといふ豪快な作業ではなく、片腕の上下運動によつて間断なく薪木を叩くといふキツヽキのやうな作業でした。

すると夫人は男に向つて、昨日は大きな丸太を割りもせず、おまけに濡れたのを差込むものだから燻(くすぶ)て目も開けてゐられなかつた、今日は良く乾いてゐますか、濡れた薪木と乾いた薪木の区別ぐらゐは御存知でせうね、と頭上から叱言を浴せますが、男は平然たるもので返答もなくキツヽキの作業をつゞけてをります。そんなに忙しくコツ〳〵と叩いて指を切りますよ。どの指がなくても不自由ですのに、指はあとから生えません、そんなに忙しく叩いても切れるものですか、もつと落付いて一撃に、ホラ、木が飛んだ、お叱言はキリもなく続きますが、男は風馬牛、自らの流儀をあくまで墨守して熱闘十分間薪木を切り終ると今度はそれを抱へ去つて風呂の火をたきつけてゐます。之が当主の太郎丸氏でした。当主は私用専断によつて下男を数日の旅行にだした、あなたが勝手にしたことですからお風呂はあなたが焚いて下さい、かう捩ぢこまれて正論に抗すべき詭弁の立てやうもないから、太郎丸氏は無念ながら風呂をたきつけてゐるのです。数名の女中もゐるけれども、各々職域を守つて堅く容喙をつゝしむことが家憲の如くでありました。

その翌日のことです。加茂五郎兵衛の手沢品や日記などを一まとめに投げ入れてあるといふ蔵の中へ案内されたのですが、太郎丸氏はたつた一冊か二冊づゝ資料をとりだしてきて若干の解説を加へて私に渡して又とりだしに消え去る。そのうちに私の前に立膝をして、唐突に天外の奇想を喋りはじめました。

あの人（といふのは自分の奥さんのことです）は只の人ではありませんよ。古代の人です。日本がまだ神代のころ九州に卑弥呼とい

ふ女の王様がゐたさうですが、あの人もさういふ人です。腕力は弱いですけど、計略が巧みですから王様になるです。あの人は村長もできるですよ。村の気風やしきたりは変るですけど、あの人の方法で村は円くをさまるです。百姓は畑をつくるよりオベッカを言ふです。日雇人夫は仕事をなまけて仏壇の前でお線香をあげたまゝ昼寝するです。そのくせ百姓が税金を納めなければ、あの人は軍隊をさしむけるです。けれども利巧な百姓は税金の半分のお金であの人に賄賂を送るです。それで村の税金は納まらぬですけど、あの人はお金持になるです。あの人は自分のお金で兵隊を養ふですから、誰も文句は言はんですよ。

そこまではまだ良かつた。すこし離れたところに折葉さんが父の日記を執りあげて読んでゐました。そこで太郎丸氏の着想は急角度に転進して、氏自ら忽然古代史の奥底に没入し去つてしまつた。

私は生きてゐるのが面倒くさくなるのですよ。死んでから、人間がどうなるか、あなたは知つてゐますか、私は知らんです。妹（折葉さんのこと）にきゝましたら、多分眠つてゐるときと同じだらうと言ふのですが、私は眠ることもあんまり好きではないです。私は熟睡できないです。その代り、一日に十六時間ぐらゐ寝床にゐます。本を読んだり寝たふりをしてゐます。私は死なうと思つたことがありました。そのとき妹に相談して一緒に死なうと思つたです。けれども、妹に相談すれば、妹は必ず一緒に死ぬと答へるですから、私は慌たゞしいことになるでせう。多分私は妹にひかれて妹のあとからフラ〳〵と死ぬやうな立場になるですから、みじめだと思つたです。さう思ひながら妹の顔を見ましたが、眼は見ませんでしたが、鼻と唇を見たです。なぜなら、そのとき妹は横を向いてゐたからです。妹の鼻の形は美しいですから。けれども整つた美しさですから、唇のみづ〳〵しさ妖しさに比べれば、永く注意を惹かなかつたです。私は唇をみつめてゐました。あなたはこの世に無限の物を見たことがありますか。私は法隆寺を見物しました。千年の昔からつゞき、そして之から何千年つゞくか知れませんが、私は然し心を動かされませんでした。あれは無限ではないです。夢殿の観音も見ましたが、私はグロテスクだと思つたゞけです。私は妹の唇を見てゐるうちに心をうたれて、無限だと思つたのです。私は妹と一緒に死ぬのはいけないことだと思ひました。私は泣いたです。一日中、寝たふりをして泣いてゐたです。泣くわけが分らなかつたですが、涙が流れていつまでも涸れないので奇妙でした。一日一晩泣きあかしたです。そして死ぬのをやめました。けれども、その後も、今も、生きてゐるのが面倒です。私は今でも時々妹の唇をぬすみ見しますが、見るたびに、段々と別のことを思ふやうになつたです。もはや無限ではないのです。私には手のとゞかない秘密があるのだと思つたです。妹は美しすぎます。私は妹を見てゐると、十里四方もつゞく満開の桜の森林があつて、そのまんなかに私だけたつた一人置きすてられてしまつたやうな寂しさを感じます。私は花びらに埋もれ、花びらを吹く風に追はれて、困りながら歩いてゐるのです。

私は若干の勇気をもつて折葉さんの方をぬすみ見ずにはゐられなかつた。さうして、私はそこに、まさしく折葉さんの横顔を見た。けれども、鼻の形や唇はとにかくとして、何事も耳に聴えぬやうな顔のあまりの涼しさに驚きました。耳があるのか、耳があるならば、この人の節制はこの世の物ではないやうな、すべて遠い世の有様を眼前に見てゐるやうな奇怪の感にとらはれましたが、その風の涼し

さはまさしく桜の森林に花びらを吹く風の類ひに異なりません。

生憎私の宙ブラリンの教養はかういふ唐突な古代史の人々の生活に対処し得る訓練が欠如してをるものですから、多分私の驚きが鏡の如く純潔な太郎丸氏に反映致したものか、太郎丸氏は大きな目を顔一ぱいに見開いて、私をヂッと見てゐました。そして私が心にもなく、なぜあなたは生きるのが面倒になるのですか、といらざる口をすべらしたものですから、私がシマッタと思つたときには、すでに顔一ぱいの大きな目を急に小さくすぼめてゐました。そして急いで立上つて、資料に就て二三事務的なことを言ひ添へて、立去つてしまつたのです。

青空文庫情報

底本：「坂口安吾全集　03」筑摩書房
　　1999（平成11）年3月20日初版第1刷発行
底本の親本：「新時代　創刊号」経国社
　　1945（昭和20）年10月1日発行
初出：「新時代　創刊号」経国社
　　1945（昭和20）年10月1日発行
※新仮名によると思われるルビの拗音、促音は、小書きしました。
入力：tatsuki
校正：noriko saito
2008年10月15日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

露の答

坂口安吾

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/